

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 22 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520461

研究課題名(和文) 在日(経験のある)ブラジル人高校生と大学生のアイデンティティとことばとの関係

研究課題名(英文) Relation between identity and language : in case of Brazilian high school and university students, who had lived in Japan

研究代表者

重松 由美 (Shigematsu, Yoshimi)

名古屋大学・国際言語文化研究科・研究員

研究者番号：80447846

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：ブラジルへ帰国後に大学への入学を果たした在日経験のあるブラジル人若年層のアイデンティティを、言語生活と社会的ネットワークに焦点を当てて究明した。

本調査の対象者であるブラジル人帰国生たちはバイリンガルであり、それは滞日中の教育の継続性と家庭内での言語使用のよるものであった。また、バイリンガルである彼らは帰国後にSNSや日系コミュニティの活用し、言語能力と人間関係を維持することができた。この事実が、バイカルチュラルなアイデンティティを形成するための重要な要因となっていることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：This study examined the ethnic identity of Brazilians adolescents of Japanese descendants, who had lived in Japan and entered in Brazilian Universities after coming back from Japan, with focus on their language behavior and social network.

The Brazilian returnees whom we had researched are bilinguals, what was attributed to the continuity of study and use of language at home during they stayed in Japan. And these bilingual Brazilians could keep linguistic competence and human relations, using SNS and Japanese community in Brazil. My research made it clear that this fact is a crucial factor in constructing bicultural identity.

研究分野：社会言語学

キーワード：アイデンティティ 言語運用 ブラジル人帰国生 在日ブラジル人

1. 研究開始当初の背景

2008年の世界的金融危機をきっかけに日本に出稼ぎに来ていたブラジル人たちは帰国を余儀なくされ、その多くは学齢期もしくは働き盛りの20代から30代の若者であった。

帰国者の就労支援として、ブラジル労働雇用省が2010年に「帰伯労働者情報支援センター」(NIATRE)が開所し、また子弟支援の活動として三井物産の協力のもと「カエルプロジェクト」が立ち上がった。しかし、メディアで取り上げる帰国者の現状は失業や不就学などに焦点が当てられるものが多かった(ニッケイ新聞2013)。このように研究開始当初は帰国者がブラジル社会に馴染めない事例に注目が集まっており、(再)適応を成し遂げた例が皆無のような印象があった。

トランスナショナルな移民研究の中でも、在日ブラジル人の帰国者のような、ブラジルで生まれ、親の日本への出稼ぎのため日本へ移住し、再度ブラジルへ戻るというケースは、従来の移民研究の成果では応用できないものである。そのため、学齢期にある子どもたちが計画的な帰国でなかったことからブラジルの学校になじめず不登校になる例や、再来日を望むばかりにブラジル社会へ溶け込む努力を捨ててしまう例などを分析し問題点を明らかにすることは必要である。しかし、本研究では帰国後ブラジル社会に適応し活躍している若年層を調査の対象とし、今後同じような背景をもつ帰国者へブラジル社会への適応のための提言ができるように実証分析を行うことにした。

ニッケイ新聞連載「第2の子供移民～その夢と現実＝日伯教育矛盾の狭間で」11回(2013年1月10日～24日)

2. 研究の目的

本研究の目的は、ブラジルへ帰国した若者の成功体験を調査することにより、ブラジル社会への(再)適応における条件や問題点を明らかにすることにある。具体的には、滞日経験を活かし日本語教師の職に就いた若者と、ブラジルの大学に入学を果たした若者を調査の対象者として取り上げた。

ポルテス(2014)では、現代アメリカの新移民第2世代にみられる適応のプロセスが移民の置かれている環境がもたらす多様な要因の影響により複雑に分節化されたものになっていると述べられている。帰国生のブラジル社会への適応プロセスも多様化・多層化していると予想される。本研究では、帰国後の実態を把握するとともに、彼らのアイデンティティの変容について調査し、社会ネットワークや言語環境とのかかわりを個々の事例ごとに分析することにした。

アレハンドロ・ポルテス/ルベン・ルンバウト著、村井忠政訳(2014)『現代アメリカ移民第二世代の研究：移民排斥と同化主義に代わる第三の道』明石書店

3. 研究の方法

ブラジルへの帰国後に日本語教師または大学に入学した若者の現状を把握するために、ロンドリーナ大学日本文化研究センター所長の藤井岡林エステラ教授、サンパウロ州立大学アシス校心理学部の岡本マリー准教授、ブラジリア連邦大学文学部外国語翻訳学科の向井裕樹教授そして現地の日本語学校の協力を得て、アイデンティティの変容に関するインタビュー調査とアンケート調査を実施した。また、ソーシャル・ネットワークを利用し形成された帰国生たちのコミュニティ“Japanese Communications”の会員たちの協力も得ることができた。

さらに、帰国者への支援活動を行っている関係者への聞き取り調査、メディアでの関連記事の収集・分析を行った。

4. 研究成果

帰国者子弟の現状を把握するためにサンパウロ州立学校 EE JÚLIA AMÁLIAA Escola Estadual Prof^a Júlia Amália de Azevedo Antunes と私立学校の COLÉGIO MARUPIARA と大志万学院を訪問した。多くの教育者が共通して、帰国後に伸びる子の特徴として「日本の公立学校に通い、家ではポルトガル語を使っていた(話せなくても、理解できる程度)」点を挙げた。日本での経験や語学力を保持しつつ、ブラジル社会に(再)適応するためには、日本での教育環境が大きく影響していることは、重松(2014)の日本語教師の職に就いた帰国者を調査した結果と一致するものであった。

2014年度と2015年度に調査したブラジルの大学進学を果たしたブラジル人帰国生のアイデンティティ形成に影響を及ぼす要因以下の通りである。

1) 個人的属性

日本の公立学校に通い、転校経験のない例が多く、継続的な教育を受けることができていた。家庭内では、親の教育方針からポルトガル語を使用しており、帰国後も生活していく上では困らない程度の語学力をつけていた。

帰国した年齢も、学校システムに適応しやすい1.5世(6-12歳)の例が最も多く、帰国理由も親の失業ではなく計画的なものであった。

2) 社会的環境

本調査では、日系人コミュニティとの関係から、彼らの社会的ネットワークを明らかにした。

帰国者の家族の多くは、来日前には日系人コミュニティとの関わりをもっていなかったが、調査対象者たちは日本文化や日本語への興味から、帰国後に自ら接触をとる例が多かった。日本文化や日本語を学ぶ理由は、就職や就学のためという実益的なためではなく、日本人としてのアイデンティティの保持

もしくは純粋に文化や言語への興味であった。

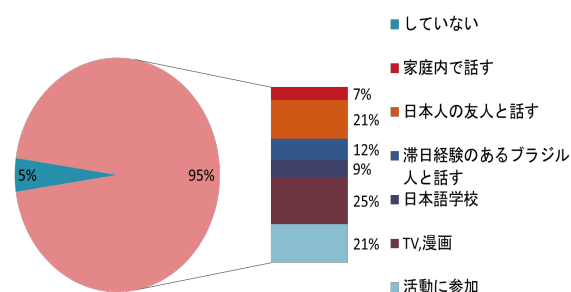


図1 日本語能力の保持方法（複数回答）

また、帰国後は SNS を利用して日本で築いた人間関係を維持し、さらに滞日経験者との新たなネットワークも構築しており、この事実により日本語能力を保持できていることが明らかとなった（図1）。

調査対象たちが帰国後に日本文化と容易に接触できた要因のひとつとして、日系コミュニティの存在がある。日系コミュニティで習得できる Yosakoi、Matsuri Dance そして Taikô などは「日伯文化」というブラジルの文化と適合しながら変化を遂げているものである。つまり、彼らの文化的アイデンティティに影響を与える「日本文化」には、先述の「日伯文化」と、メディアや SNS を通じて手に入れることができる流行に関する情報や時事問題など現在の「日本文化」、そして滞日中に習得した地域色の強いもしくは在日ブラジル人コミュニティ内の「日本文化」がある。

3) 家族構成

両親が日系もしくは非日系であるかについてのみの調査であった。今後は親のアイデンティティや社会的地位を調査内容に加えることとする。

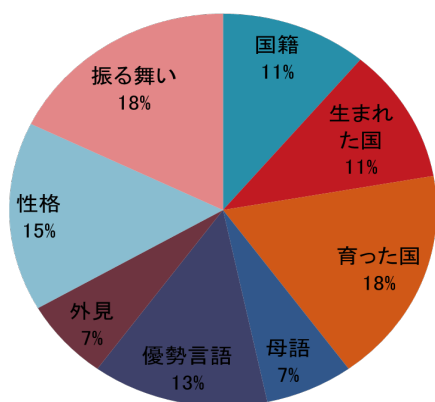


図2 アイデンティティに影響を与えた要因（複数回答）

調査結果としてアイデンティティ形成に影響を及ぼした要因には前述した3点以外にも、国籍、環境、言語、性格に関する自己評価があった（図2）。バイリンガルな調査対象者たちは、日系コミュニティの支援を享受し、日本で獲得した言語や価値観を保持しつつ、ブラジル人としてのアイデンティティとバランスよく構築させていることが明らかとなった。

4) その他

2012年12月4日にJICA中部にて「多文化共生推進協議会においてブラジル連邦共和国から受け入れた研修員の活動報告会」にてファシリテーターを務めた。

2013年3月30日に名古屋大学にて講演会「在日外国人の現状 大学ができることとはー」を開催し、東海圏のブラジル人コミュニティとペルー人コミュニティで活動するNPO法人の代表者を講師に招き、支援活動の紹介や多文化共生の実現のために大学ができることについて討論を行った（水戸博之代表の基盤研究(C)課題番号22520559「スペイン語・ポルトガル語近親言語文化圏間の外国教育と相互理解の諸相」と共催）。

ブラジル文化紹介の小冊子「多様な文化をもつブラジル」を作成し、在日ブラジル人児童・生徒への支援活動を行っている教育機関やNPO法人へ寄贈した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計1件)

重松由美、ブラジル人帰国性のための支援とはー滞日経験を活かして日本語教師になる場合、ANAIS 日本ポルトガル・ブラジル学会、査読有、43号、2014、

〔学会発表〕(計3件)

重松由美、在日ブラジル人高校生と大学生の言語運用と言語意識、日本ラテンアメリカ学会、2012年6月3日、中部大学

重松由美、ブラジル人帰国性の現状 滞日経験を活かし日本語教師に就いた例、日本ポルトガル・ブラジル学会、2012年10月20日、天理大学

重松由美、ブラジル人帰国生の現状 ブラジルでの日本文化との係わりについて、日本ラテンアメリカ学会中部日本部会、2013年12月7日、名古屋大学

ブラジルの大学へ入学を果たしたブラジル人帰国生のアイデンティティ、日本ポルトガル・ブラジル学会関西支部会、2015年3月28日、京都外国語大学

〔図書〕(計1件)

重松由美、ブラジル・ポルトガル語を話そう!、朝日出版社、2014、1-62

〔産業財産権〕
出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

重松由美 (SHIGEMATSU YOSHIMI)
名古屋大学、国際言語文化研究科、学術研
究員
研究者番号：80447846

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：